

誠実に「時代」撮った内野雅文



15～28日、東京・新宿ニコンサロンで開かれる「車窓から」展より

深い付き合いはなかったが、急逝の報には意外の念を禁じ得なかった。まだ34歳。大柄で、柔らかな笑顔をした写真家だった。

内野雅文さん——日本各地を歩く旅ものや、都市の変化を見つめるスナップを続けていた。最近では京都を撮ろうと、現地に腰を据えていたそうだが、今年元日の未明、撮影中の八坂神社で倒れた。心筋梗塞。救急隊員に名前と年齢、そして胸が痛い^{こころせき}と伝え、ほどなく息を引き取ったという。

彼の仕事は2004年、「現代空間論」という連載の中で記事にしている。それまで8年、“ケータイのある都市風景”を撮りためていたのだ。目の前にいない誰かと話す女性たち。その私的な表情が都市の雰囲気^{ふんいき}を大きく変えたことが、はっきり写っていた。

記事に添える写真について、慎重に相談したのを思い出す。街頭スナップを載せるには、肖像権やプライバシーに配慮する必要があるからだ。しかし発表に制約があったにせよ、彼が撮っていなかったら、この都市空間の変化は目に見える形で残ったのかどうか。

恩師にあたる写真家の高梨豊さんは「ストレートに時代と向き合う姿勢を持っていた。無償の行為だとも言えるが、それが写真をやる人間の基本だと思う」と誠実な姿勢を惜しむ。

幸いにも、残された写真を紹介する動きが盛り上がっている。生前に開催が決まっていた「車窓から」展や友人有志による遺作展が4月後半以降、東京と大阪の計7か所で開かれる。問い合わせはルーニィ・247フォトグラフィー(03・3341・8118)。若手写真家を支援する山梨・清里フォトアートミュージアムも現在、収蔵作品を展示している。

(前田恭二)